

冬山の國ざかひなるいただきを揺れまがり  
つつ行けるわが汽車

櫻島はけむりを吐かぬ島なりき、あはれ死に  
たる火の山にありき

梅寒き宿屋の二階、すみの部屋、夕日の薩摩明  
らけく見ゆ

酔ひざめのこころの水のごとかるに痛しや  
夕日あかあかと浸む

海の黒さよ、ほそぼそとしてうかびたる佐多  
の岬の夕日の濃さよ

浪高み船のあゆみの遅さよな、みさきの端の  
白き燈臺

入りゆけば港はおもきらくじつに鷗のむれ  
も灰色に見ゆ

やよ窓に灯をともしなかれ、海はいま薔薇い  
ろに暮る、やよわが黒船

やよ老人、いま船室には君とわれのみ我がさ  
かづきをねがはくは受けよ

船は揺るれども歩むともなし、窓に黒く月夜  
の陸が見ゆれども動かず

あはれ悲しいで衣服をぬがばやと思ふ、海は  
青き魚のごとくうねり光れり

あまり赤く、あまりあまきこの密柑かな、海は  
をんなに似て青く動く日

心のみいらだちて身はガラスの玉のごとし  
海は動く、蒼くななめに動く

身ぞ染まる、青き笑、人魚の笑、海死にてわが眼  
石のごとく盲ひたるに

絶壁を這ひあがる、黒き猫とや見えむ、いまか  
なしき絶壁を這ひ上る

とかくして登りつきたる山のごとき巨岩の  
うへのわれに海青し

岩角よりのぞくかなしき海の隅にあはれ舟  
人ちさき帆を上ぐ

孤獨よ、黒鐵のごときこの岩の上にあざやか  
に我が陰翳を刻め

さかしくも孤獨のひとみの輝くことよ、黒鐵  
なせる岩の間に

かなしくも海うみに濡ぬれたるわがいのち、わが孤こ  
獨ど、あはれ太陽たいやうよりかくれまほしき

悲かなしみに身みもいらち、黒くろく巨おほいなる岩いのかげ  
に尿いばりをぞする、海うみ青あをく動うごく

うれし、うれし、海うみが曇くもる、これから漸おそく私わたしのか  
らだにもあぶらが出る

蜘蛛くまが海うみよりも大おほきく見みゆ、眼めのまへに松まつよ  
りさがりし蜘蛛くま

岬なる鬱憂の森、海は病み、ただ一羽かなしき  
鳥まへり

身體は一枚の眼となりぬ、青くかがやける海、  
ひらたき太陽

岩のあひだを這ひて歩く、はだしで、笑ひて、海  
とわれと

鶺鴒が一羽不意にとびたちぬ、岩かげの藍いろ  
の浪のふくらみより

下駄をぬいでおいたところへ来た、これから  
また市街へ歸るのだ

岬の森よりしぶしぶ歸らむとすれば、港の市  
街にかなしき汽笛鳴る

この帆にも日光の明暗あり、かなしや、あをき  
海のうへに

水平線が鋸の刃のごとく見ゆ、太陽のかけ  
なる浪のいたましさよ



太陽の具合で海がわが額の皺のやうに髪を  
つくる、呼吸の苦しいこの窓

わが窓の冷たさよ、海はけふ實にいく度びか  
色彩を變へけむ

少女よ、その蜜柑を摘むことなかれ、かなしき  
葉のかげの

ひややかに海のごとく廣き帆の來りぬ、港の  
旅館の窓のまへに

微雨びうのなかに鳥とりまへり、海うみの蒼あをさ、冷つめたさ、やう  
やく夜よるとならむとするこの窓まど

光ひかり無なき海うみ、濃こき藍あゐ色いろにたたえたり、雨あめ晴はれむと  
して一いち羽はのしろき鳥とり

闇夜あんやの波なみは戀こひするをんなの指ゆびのごとし、小こら  
ムブとわれとの窓まどのしたに

窓まどから下したを見おろす、つめたい夜よるがうなじに  
も背そびらにも

わがこころよ、今し鶺鴒のごとくかへり來よ、夜の窓、濤のひびきのみ満てるに

精力を浪費するなかれ、はぐくめよと涙して  
おもふ、夜の濤に濡れし窓邊に

闇に眼の馴れぬあひだの港の市街、戸出づれば  
濤の四方にくだくる

かなしき月出づるなりけり、限りなく闇なれ  
とねがふ海のうへの夜に

とある雲のかたち  
に夏をおもひいでぬ、三月  
の海のさびしき紫紺

春の日の真黒き岩にあふむけにまろがりて  
居れば睡眠さしきたる

太陽にあたためられしこの黒きおほいなる  
岩にいざやねむらむ

白き猫そらになくがにあをうみの春日のか  
げに啼き居る鷗

200

われ知らずうたひいだせるわが聲のさびし  
さよ、春日紫紺いろの海

淫慾は冷たかりけり、濃くうすくわが身のう  
へに照りかげりする

這ひあがり岩のかどより海を見る、さびしき  
紫紺、さびしき浪のむれ

201

をちこちに岩のとがれる、陰翳おほき午後四  
時の紺の海となりけり

岩かどに着物かきさき爪をやぶりきりざし  
を攀づ、椿折るとて

潮引きてつかればてたる岩かどにせまき海  
見え浪のうごける

油なし浪ぞねばれる、曇り日の海に群れたる  
海女のをとめ等

高<sup>たか</sup>まりたかまりつひに碎<sup>くだ</sup>けずにきえゆきし  
曇<sup>くも</sup>り日<sup>ひ</sup>の沖<sup>おき</sup>の浪<sup>なみ</sup>のかげかな

わが頬<sup>ほ</sup>のかすかの熱<sup>あつ</sup>や、小窓<sup>こまど</sup>より海<sup>うみ</sup>見<sup>み</sup>てあれ  
ば蝙蝠<sup>かろうもじ</sup>のとぶ

なみ高<sup>たか</sup>し、雨<sup>う</sup>後<sup>ご</sup>の春<sup>はる</sup>日<sup>び</sup>をはらみたる綿<sup>わた</sup>雲<sup>ぐも</sup>のか  
げにみさご啼<sup>な</sup>くなり

石<sup>いし</sup>のごと首<sup>くび</sup>つきいだし二<sup>に</sup>階<sup>かい</sup>なる窓<sup>まど</sup>に海<sup>うみ</sup>見<sup>み</sup>つ  
つ疲<sup>つか</sup>れはてにけり

げにながく見<sup>み</sup>ずありけりと海<sup>うみ</sup>を見<sup>み</sup>にうちい  
でてきぬこころを運<sup>は</sup>び

夜<sup>よる</sup>の海<sup>うみ</sup>あぶらのごとく油<sup>あぶら</sup>繪<sup>ゑ</sup>のごとく孤<sup>こ</sup>獨<sup>どく</sup>を  
かなしましむる

春<sup>はる</sup>のうみ魚<sup>うを</sup>のごとくに舟<sup>ふね</sup>をやるうらわかき  
舟<sup>か</sup>子<sup>こ</sup>は唄<sup>うた</sup>もうたはず

海<sup>うみ</sup>を見<sup>み</sup>てあり、海<sup>うみ</sup>に染<sup>そ</sup>められわがこころしば  
しいろづく、海<sup>うみ</sup>を見<sup>み</sup>てあり



太陽を拜まむ、海もそらもひとつ色なり、いま  
太陽ををろがまむ

太陽をたのしめとふと心に云ひておどろき  
て涙ながれぬ

椿の花、椿のはな、わがこころも一枚の繪のご  
とくなれ一面となれ

紺いろの干潮の海はわがこころの浅きにも  
似てもの憂かりけり

わびしき濱かな、貝がらのくず砂のくずいざ  
やひろはむ、海も晴るるに

夜の雨しじにふるなり、沖津邊はかすかにひ  
かりかすかに光る

よるの雨そこともわかぬ海岸にほのじろき  
泡のつづくなりけり

わがたましひのはしに悲しく染まり居る海  
の蒼みよ、夜となりけり

潮引きてあらはれし岩に鷗居り空みて啼け  
ば下りくるがあり

おのづから盲目のごとく岩を踏む、海見れば  
湧くおもひさびしも

夕陽に透き浪のそこひに魚の見ゆ、あるまじ  
きこと思ふべからず

默然と岩を見つめておもふこと、ひとに告ぐ  
べききはならなくに

手に觸るるわびしき記憶あざやけき悔岩を  
めぐりて浪ぞむらがる

古き繪の布のやぶれにのこりたるわびしき  
藍の海となりにけり

日本語のまづしさか、わがこころの貧しさか  
海は瘦せて青くひかれり

太陽かがやき引しほの海は羽あをき一羽の  
蝶となりてうごかず

をんなの匂<sup>にほ</sup>ひなりけり、ふと雲<sup>くも</sup>がわたれば海<sup>うみ</sup>  
のあをくかげれる

たらたらと砂<sup>すな</sup>ぞくづるるわが踏<sup>ふ</sup>めば砂<sup>すな</sup>ぞく  
づるる、ある色<sup>いろ</sup>のうみの低<sup>ひ</sup>さよ

一<sup>いっ</sup>灣<sup>わん</sup>の海<sup>うみ</sup>の蒼<sup>あを</sup>みの深<sup>ふか</sup>みゆきわが顔<sup>かほ</sup>に來<sup>き</sup>て苦<sup>く</sup>  
痛<sup>つら</sup>とぞなる

海<sup>うみ</sup>もまた倦<sup>う</sup>むらし、わが靈<sup>れい</sup>魂<sup>こん</sup>は曇<sup>くも</sup>らむとす、い  
づくに動<sup>うご</sup>き行<sup>ゆ</sup>かむとするや小<sup>こ</sup>蟹<sup>がに</sup>よ

木の葉にも盛れるがごとく海は小さし、わが  
命燃え燃えて、一すぢの青き煙たつ

椿の木、椿の木、わが憂愁にきらきらとひらた  
き海のうつりかがやく

天地創造の日の悲哀と苦痛とけふわが胸に  
新たなり、海にうかべる鳥だにもなし

陰翳を知らざるかの太陽のほとりよりうま  
れて雲のおりてくるなり

けぶりなし揺れゆるる海の反映、陽は黄ばみ  
わが顔の海の反映

ふと浪にむかひてうすく笑ひけり、あやふき  
岩を降りはてしとき

浪のかげより顔をいだせる海女のあり、眼も  
あをあをと口笛を吹く

あら砂のすさめるこころ蒼白み海にむかひ  
せうちうめくかな

海<sup>うみ</sup>よかげれ水<sup>すい</sup>平<sup>へい</sup>線<sup>せん</sup>の黝<sup>くろ</sup>みより雲<sup>くも</sup>よ出<sup>い</sup>で來<sup>き</sup>て  
海<sup>うみ</sup>わたれかし

岩<sup>い</sup>かげの浪<sup>なみ</sup>のひとつのふくらみに彼<sup>かの</sup>女<sup>ぢよ</sup>のか  
ほをえがき淋<sup>さび</sup>しむ

わが顔<sup>かほ</sup>の海<sup>うみ</sup>の反<sup>はん</sup>映<sup>えい</sup>、一<sup>ひと</sup>羽<sup>は</sup>のかもめしらじらと  
してまひいでにけり

日<sup>ひ</sup>光<sup>みつ</sup>のかげのごとくにちらちらと海<sup>うみ</sup>鳥<sup>どり</sup>あま  
たむれとべるかな



酔  
樵  
歌

鳥のおほさよちひさき波のたちさわぎ海あ  
さあさとかげりきたりぬ

栖めるかぎりのやどかりをみな殺しつくし  
静けき岩になすよしもがな

われも木を伐る、ひろきふもとの雑木原春日  
つめたや、われも木を伐る

春はるの木こ立たちに小よ斧き振ふることのかなしさよ、前ぜん後ご  
不ふ覺かくに伐きりくづしけり

さくさくと伐きりてありしが、待まちてしばし、しば  
しはものをおもはざりける

樹とがの木きのしげれるかげに小こ半はんどきあまり小よ  
斧きふり伐きりたふしける

春はるの木きは水すい氣きゆたかに鉋たが切ぎれのよしといふ  
なり春はるの木きを伐きる

山<sup>やま</sup>柴<sup>しば</sup>の櫛<sup>かじ</sup>の冬<sup>ふゆ</sup>青<sup>あお</sup>木<sup>き</sup>のいろいろあるなかに椿<sup>つばき</sup>  
まじれるかなしかりけり

椿<sup>つばき</sup>の木<sup>き</sup>は葉<sup>は</sup>のしげければぼつたりとつめた  
き音<sup>ね</sup>してつちにたふるる

わが伐<sup>き</sup>りし木<sup>き</sup>木<sup>き</sup>のみだれてたふれたる青<sup>あお</sup>き  
すがたを見<sup>み</sup>てあるしばし

ややありて指<sup>ゆび</sup>にはまめのできてきぬもはや  
やめむと木<sup>き</sup>かげに坐<sup>ま</sup>る

青木伐り、つかれて村のむすめたち夜床のく  
しきはなしをぞする

さびしさにむすめの群に入りゆけばひとり  
のむすめわれにいふことに

峰高み海見をすれば春がすみをどめるをち  
に青く見ゆかに

ながめ居ればかすみのをちに見えきたる海  
あり海のなかに島あり

あの山やまこの山やま粘土ねいど細工さいこうのごとくにも見みえき  
たるなり淋しみしみて居をれば

人ひと聲こゑぞとおもへば鳥からすにありにけり春はる日ひけぶ  
れるみねの松まつ山やま

見みおろせばふもとに山やまの幾いくうねりうねれる  
にみな松まつの生おひたる

をのへなる松まつの山やまこそ明あかるけれそのまつ山やま  
に入りゆく樵きり夫ら

そこかしこ山やまに老木おいきの松まつをもとめ大おほまさか  
りをふるふ男おとこよ

236

そのそばに子どもと犬いぬとがついて居ゐり大おほま  
さかりを振ふるきこりのそばに

つぎつぎに伐きり倒たふさるる松まつの木きをながめて  
居ゐれば春はる日ひさびしも

どよめかしまつたく松まつのたふれ終おはりぬ大おほま  
さかりの汗あせばめるかな

237

わな見にとまだきに行けばおほいなる兎か  
かり居りわれを見て啼く

わな張りしは椿のかげにありにけりうさぎ  
かかりて椿散り居り

霞に濡れて黒くつめたく山がせまる、窪地の  
しげみに雉子待つわれに

かすんだ山にをりをり風が来る、樹が鳴る、わ  
が手の銃のつめたさよ



つつの音がわれとわがこころに響く、深夜の  
酒のごとくひびく

我がかなしみに火をつけるやうに、地團太踏  
みて鳥を逐ふなり

見知らぬ窪地の灌木原におりて来た、見廻せ  
ば、見まはせば春の鳥啼く

傷つきて鳥かかりたる喬木に攀ちむとて走  
せ寄れば、青き樅の樹

テーブルの上いつばいに枝はひろがり咲き  
群がる躑躅、夜の青い瓶

ペンさきに滲み出るインキ、ふと顔をあぐれ  
ば顔をつつめるつつじ

赤いつつじの咲きみだれた夜のテーブルに  
洋燈をつけて、すぐ消した

夜になれば健康の恢復して来るごときわが  
身体、ランプのかげの躑躅

黄色なつつじもあると思ふ、この血のごとき  
つつじのほか、夜のテーブル

不眠症ととざさぬ窓と戸外の闇と、ときどき  
机に落つる赤い躑躅

わけとてはなくちだんだを踏んでよろこん  
でみた、喜んだとてなににならうぞ

居るところを失くしたところがうつとりと  
かなしい日光を見つめて居る

遠い麓に杉の木がまばらに立つて居る、人の  
生にある悲哀のやうに

焼酎に蜂蜜を混ざればうまい酒となる、酒と  
なる、春の外光

わがこころは極りなし、底もなし、ふたもなし、  
その心先づありやなしや

萬葉集、いにしへびとのかなしみに身も染ま  
りつつ讀む萬葉集

人<sup>ひと</sup>鷹<sup>たか</sup>の歌<sup>うた</sup>をしみじみ讀<sup>よ</sup>めるとき汗<sup>あせ</sup>となり春<sup>はる</sup>  
の日は背<sup>せな</sup>をながるる

からくりめけるわれのこころのはたらきの  
はたと止<sup>と</sup>まれり、雲雀<sup>ひばり</sup>うららうらら

この國<sup>くに</sup>に雪<sup>ゆき</sup>も降<sup>ふ</sup>らねばわがこころ乾<sup>かわ</sup>きにか  
わき春<sup>はる</sup>に入るなり

穴<sup>す</sup>だらけのわが心<sup>こゝろ</sup>のその穴<sup>す</sup>にこの穴<sup>す</sup>に小鳥<sup>こどり</sup>  
が眼<sup>め</sup>を出<sup>だ</sup>しびいとなき、びいと啼<sup>な</sup>く

藍甕あゐがめに顔をかほをひたしてしたしたにしたたる藍あゐ  
を見みばやとぞ思おもふ

鶴せき鶴れいが雲ひば雀りの聲こゑによく似にるとこころに云いひ  
てあふぐ春はるの日ひ

氣きがつけばこの春はるはいまだ椿つばきを見みず、くれな  
ゐの花はなをさびしくおもへり

曇くもり日びのかすみのなかに鳥啼かきき鶴せき鶴れい啼なき溪たにに  
のぞみてこの窓まどの高たかさよな

じつと忍んで見て居れば、慕が啼く、大きな咽の  
喉をあけて春の日に啼く

オヤ、そこにも啼く、なかに椎の樹二三本、けら  
らけららと慕啼きかはす

慕の眼のかなしさよ、つまが戀しとひたなき  
に啼くその慕の眼

踏めばくづるる山の赤つち、乾いた土、どこに  
しのんで慕の啼くぞえ

ほろほろとつちのくづれて墓ひきの啼なく、きりぎ  
しの春はるのつちのわれめに

水みづ甕がめに烙やきつけられしつめたい青あをい裸ち體たい畫え  
のやうなわがこころ

觸ふれなばただちにものをばわれのいろに染そ  
めむ火ひのごとき心こころ燃もえたたず居ゐり

なやましき匂におひなりけり、わがさびしさの深ふか  
きかげより鱗ういふりて來きる



をんなが濡れた繪具のごとくそばを通る、つ  
めたいさびしい春の一日

我がうてるうさぎ雉子の肉つねに厨の釘に  
絶えざり、春暮れかかる

夜ふけの厨にうさぎの股をさきとりて火に  
あぶるとき、きたれる孤獨の日の心

なにはあれ第一の峰にのぼらむとかすめる  
山の脊を歩み居り

深山みけわけ入り朽木くもの松まつのふしを掘ほるその松まつ  
の節せたいまつとなる

けむりありて山やまに野の火ひ燃もゆ、くもり日ひのひか  
れるそらを啼なきゆく鳥とり

太陽たいようのかげりてゆけば悲かなしみつ雲くもいでて照て  
ればよろこびぬ峰みねのとがりに

朝あさの圍かき爐いろり裡り猫ねこもとりわけあまゆるをあやし  
てあれば啼なけるうぐひす

けふも雨ふる、蛙よるるびしよぼしよぼに濡  
れて櫻も咲さいでにけり

ねられぬままに起きて机の椅子に凭る、家を  
つつめる夜の雨かな

春雨にみかさまさりて谷ぞこを石のながる  
るねざめてぞ聞く

春の日のぬくみかなしも、ひたすらに浅瀬に  
たちて鮎つゝ居れば

瀬の鮎子わが瘦脛もきよらかに寒みいたみて春はゆくなり

鳥うちのかへさは夜となりにけり山ざくらさへうちかざしたる

すずしげに顔の感覺はたらけり、のちのつかれをおもはずもがな

不眠症のラムプのかげのわが夜明、瓦たたきで雨ふりしきる

夜の蝶のこの濃ねずみのなつかしや、このい  
ろなせる帽子が  
あぢむのさ  
あぢむのさ

いだ釣ると春の川瀬につどひたるふるさと  
びとら黒き衣着る

わが好きはこの灌木の原なれや、高くそびえ  
てかげる樹もなし

ぐだらぬものおもひをばやめにせむ、なにか  
匂ふは屁臭蔓が

海うみいろにうちかがり居ゐりかづら取とるとてわ  
がひとり入いる尾鈴おすずの山やまは

縦たてに這はふ青あおきかづらよそのかづら取とらむと  
縦たてをのぞみつゝ行く

いとながさかづらにありけり青あおきかづら引ひ  
はども引ひけども盡つきむともせず

春はるの日ひや老おいしかづらのあをあと葉はをつ  
けて居ゐり青あおかづら引ひ

いとながく青きかつらをわれの引く身うち  
のちからこめてわが引く

ぬすみする人のごとくにひそひそと深山に  
ひとりかつら引くなり

わが身十あまりあはせてなほ足らぬふとき  
縦なりよきかつら生ふる

かつら生ふるは山の北かげ春の日にほひ  
もさむき山の北かげ

青かづら籠にみちみちぬいまはとてかへら  
むとすれば山も暮れにき

み な か み	著 作 者	若 山	發 行 所	東 京 市 京 橋 區 銀 座 三 丁 目 八 番 地
大 正 二 年 九 月 五 日 印 刷	發 行 者	初 山 仁 三 郎		新 替 野 金 東 京 二 四 丁 七 番
大 正 二 年 九 月 十 日 發 行	印 刷 者	東 京 市 芝 罎 區 三 丁 目 二 番 地		大 阪 市 南 久 太 郎 町 三 丁 目
定 價 金 七 拾 錢	印 刷 所	小 松 周 助 東 京 市 芝 罎 區 愛 宕 町 三 丁 目 二 番 地		攝 津 野 命 大 阪 一 三 六 八 六 番
		東 洋 印 刷 株 式 會 社		京 都 市 祇 園 町 南 側 萬 壽 寺 路
				振 替 野 命 大 阪 二 〇 八 九 二 番

初 山 書 店  
東 京 京 都 大 阪



集歌

昨日まで

吉井勇著

昨日まで・秋と冬・郊外  
夏・紅燈  
谷に來て・三藝人・逃亡

274  
368

終